

空手道詳説（26）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

（4）敗北の結果

③ 日本側から見た謝名親方

尚寧王をはじめとする琉球国の高官たちは、戦乱の責任者として薩摩藩に連行された。しかし、薩摩に幽閉されながらも、謝名は密かに明国に救援依頼の密書を送り続けていたという。どのような手段をもって通信していたかは分からないが、前の項に記した方術を使ったのではという言い伝えがある。

謝名9代前の先祖鄭氏湖城殿内は、福建福州府出身の明国人である。また、7年間も「国子監」に留学していたのだから、明国の支配力が持つ強大さと、文化文明の奥深さを肝に銘じていたに相違ない。帰国後は親明国派として、日本（大和）とは一線を画す思想と言動があったとしても不思議はない。

これまで、日本との関わりの中で謝名が取った行動を挙げれば、

ア 1602年仙台藩へ琉球船が漂着し、その後、徳川家康や薩摩藩の援助により帰還できた。征夷大將軍となった徳川家康に対し謝恩の礼を促されるが、尚寧王は謝名の上奏によりこれに応じなかった。道義的に後味の悪さを残した感は否めない。

イ 1603年、アと関連して謝恩の礼が無いのを無礼とみなした家康は、琉球に攻撃を仕掛けようと動き出した。察した島津家久は、同国に大慈寺の僧龍雲を派遣し、尚寧王に家康に恭順しないと大変なことになると諭させた。国王を補佐する立場にあった謝名は、島津の説得に全く理解を示さないばかりか、使者の僧を侮辱し辱めた。

ウ 1608年、島津家久に対し家康から琉球征伐の命が下り、薩摩軍が侵攻を開始した。島々を制圧し本島の今帰仁に到達したのを知るや、尚寧王は和睦の使者として首里円覚寺の僧菊隠他を遣わした。薩摩側から『那覇で和睦の談合を行う』との同意を得るが、謝名は久米村に本拠を置き、那覇港に3000名の兵を動員して徹底抗戦に出たため、双方に多数の死傷者を出しながら、結果、謝名軍は敗北した。その間に、首里城は薩摩軍に包囲され、尚寧王は降伏した。

エ 1611年9月、2年4か月も俘虜の身にあつて、帰国を許される条件として『琉球は古来より島津氏の附庸国（大国の勢力下にある小国）である』という高圧的な起請文と、「掟十五条」への連署を要求されたが、謝名一人これを拒み処刑された。

以上の内、ア～ウについて謝名の取った行動は、それまでの過程で薩摩藩（島津家久）の勧めにに応じているなら、対話による円満解決により戦禍は免れることではなはずである。その機会を失し、結果として薩摩藩の武力侵攻（琉球征伐）をもたらしたため、双方共に多大なる人的物的被害を招いた。

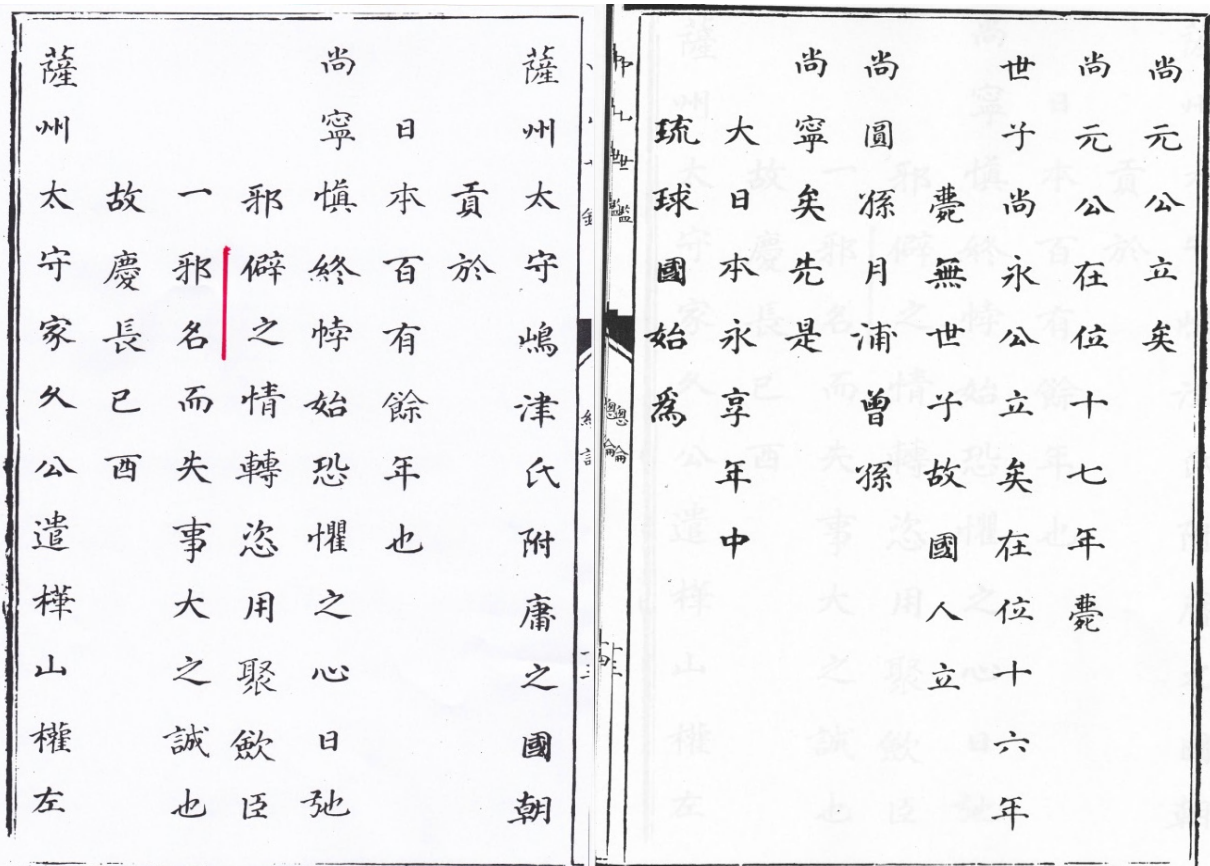
ここまでに至る謝名の奏聞や、合戦時の抵抗は両国にとって益するところ皆無で、損失だけが目に付く。

最後に至っては、スムーズに取り運ばれると思った帰国条件に対し、薩摩藩主をはじめ戦勝側の不快感を抱かせたて終わる。

次の写しは、筆者が所持する「中山世鑑」から尚寧王のところを抜き出した。

右ページ5行目には、尚寧王は第二尚氏王統初代尚円の孫で月浦（尚真の長男）の曾孫と記され、左ページ1行目には「嶋津氏附庸之國」と明記、6行目には筆者が赤傍線したように、謝名を悪者と決めつけ「邪名」の字を当てている。

そもそも「中山世鑑」は、島津藩侵攻後約40年を経た第10代尚質王の時代に、琉球国最初の史書として羽地朝秀が編纂したもので、これは薩摩の支配が意識の中にあるため、日琉同祖論などをもって日本側の不快感を招かない配慮があること否定できない。羽地が同じ国の高官を「邪名」と書くこと自体、違和に感じてしまう。



(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を考える」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行